

原始林保存

区域のこと

大内 倫文



先頃、市内の古書店にて「山・雪・探検」（加納一郎著・昭和三十年）なる新書版を手に入れた。加納一郎と言えば、極地研究家の大御所であり、今さらその業績を述べる必要はないであろう。

本書は、表題のとおり山と雪と探検

に関わるエッセイを収録したものである。その中で興味深く読んだ文が幾つかあった。と言うのは、日頃私が感じていることと一致していたからである。

特に、北海道の自然景観と自然保護とを絡み合わせた短文「三股高原」、「支笏・摩周・阿寒」、「原始保存区域のこと」では、作者の強烈な個性ならびに先見を垣間見る思いだった。

ここに、「原始保存区域のこと」から、国立公園に関する一部を抜粋して紹介してみる。

「……国立公園がたくさんあってもよいのであるが、国立公園だということからは、それらしくあるべきであろう。

からだじゅう顔だと思えば寒いことはない。……いつそのこと、日本中を国立公園のつもりで、国土の美的取扱いに、国民あげつとめるようにしたらどうであろうか。

ほんとうに天然の景観を愛するもののために、国が何らかの施設をしてやろうというのならば、私は次のことを提案する。

狩猟家のために禁猟区が設けられて、一年のうち一定の日を限り人数を定めて入猟させるやり方、あれと同じように、たとえば阿寒とか摩周とか……区域一箇所を限って入地を制限しておいて、一年のうちの最もよいシーズンに一定の人数だけ入ることを許す。いかなる場合でも団体旅行者は入れないこ

とにする。もとよりその区域内では原始保存の手当をし、人工的なものは一切工作しない。一見、非民主的なやり方の方であるが、ほんとうに天然景観を愛好するものにとつては、せめてそうでもしてもらわないかぎり、阿寒も摩周も、石狩川奥地もやがてキャラメル紙くずだらけになるにきまつているから、私は、いまのうちにこういう提案をしておくのである。」と。

今から三十数年前に、現在でも頭を悩ませている問題に関して断言していることは驚嘆である。しかしながら、その後これらの課題は実施改善されることなく現在に至つていと言つても過言ではないであろう。

ここで今の世に加えなければならぬことは車の出入の規制であろう。人間である以上、歩くと言う行為を忘れてはならない。スイスのツエルマットでは、排気ガスを出す車の乗入れは禁止され、電気自動車だけが認められている。このような保護政策もより多く実施すべきことであろう。

また、アメリカのマツキンリー国立公園等の管理においても、加納氏の言う人員制度の方式がとられ日本の現状とは比較にならない保護措置がとられている。

これらのことが遅々として進んでいないのは、戦後四十余年の著しい文明の発展とは逆に文化面の向上がなされ

ていないことを意味するものであろう。特に、個々の道徳心は低下し、キャラメル紙くずのかわりにアキカン等のポイ投げが氾濫しているのが現状である。

さらには、近年リゾート開発の波があちらこちらで流行語のように打ち寄せてきている。静かな自然界にはいつのまにか周囲の自然とは不均衡なコンクリートの塊が出現し、そこでは文明の力を利用するだけの一部の文化人がフルコースなる豪華な食物をもつて宴をする。まさに、都会の一部が引越してきたようなものである。

本来、自然と融合しそれを満喫するには、フィールドに出て徘徊する位の気持は必要である。便利であれば便利なほど、自然との密着は薄くなるものである。

同様に、巷の山々でも文明の力が出現し、一つの問題が生じてきている。静かな一時をと思いながら歩く登山者を尻目にスノーモービルが行き交っている。騒音と排気ガスをまきちらし、成長過程の幼樹をなぎ倒し、かつまた空のオイル缶を投げ捨て縦横無尽に走り回る。

今、森の動物達はどこに引越ししよるか悩んでいるに違いない。

モラルをもつての行動が欲しい昨今である。一人一人のモラルが向上すれば文化も向上し、よりいつその夢を

我々の子供達に贈ることができるであろう。

大内倫文（おおうち みちふみ）

一九四八年茨木県三戸市に生る。

北大農学部農業工学科卒。

北大ワングルプOB。日本ヒマラヤ協会所属。

千歳鶴サービステーション「つる」経営。

現在、海外登山に興味をいだいている。